



定藤丈弘教授の急逝を悼む

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 里見, 賢治 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/6836

定藤丈弘教授の急逝を悼む

大阪府立大学社会問題研究会長
(社会福祉学部長)
里見賢治

定藤丈弘教授は、丁度1年前の1999年1月30日夜、妻邦子夫人とご家族、何人かの友人に見守られながら、56年と5ヶ月半の生涯を閉じた。直接の死因は心不全であったが、もともと過労気味のところにインフルエンザをこじらせて体力を消耗してしまったのが決定的だったように思える。まことに痛恨の極みで、いまだに呆然たる思いがある。

定藤教授の履歴および業績については、本誌巻末の履歴・業績一覧や、さらに詳しくは『障害者の機会平等と自立生活 一定藤丈弘 その福祉の世界ー』（北野誠一・石田易司・大熊由紀子・里見賢治編、明石書店、1999年）所収の「定藤丈弘主要研究業績及び社会活動一覧」に譲ることとし、ここでは簡単な紹介にとどめておきたい。

定藤教授は1942年8月14日に生まれ、その後現役で関西学院大学商学部に入學、途中同大学社会学部に転じて社会福祉学を専攻するようになった。在学中に彼はキリスト教の洗礼を受けているが、そうした事情も社会福祉学専攻への転換に関係していたようである。その後関西学院大学大学院社会学研究科修士課程に進み1967年修了、大阪市社会福祉協議会に務めた後、1969年熊本短期大学講師に就任し、研究者としてのスタートをきった。1976年には本学部の前身である大阪社会事業短期大学（社大）講師に着任したが、その年の12月14日、友人の車に同乗していて交通事故にあい、頸椎6番、7番に受傷し、以後車椅子で生活することになった。幸い復帰に賭ける彼の不屈の意志とそれを支援する先輩・同僚教員の努力によって、1977年10月に教壇への復帰を果たし、以後車椅子の社会福祉学者としての定藤教授の新しい活躍が始まった。

1981年、本学部の創立とともに助教授に就任、1992年教授に昇任し、1997年社会福祉学部図書室長（研究・図書委員長）、同年8月に私が社会福祉学部長に就任するのと同時に大阪府立大学評議員に就任し、管理職として大学・

学部運営にコミットすることになった。その矢先の急逝であった。

私が彼と知り合ったのは、社大への彼の赴任の前後で、年齢も同じであったことから親しく付き合うようになった。赴任直後の彼は学生に最も人気のある教員の一人で、ラケットを抱えてテニスコートに通うさっそうとした彼の姿を覚えている。

人間として、また研究者としての定藤教授の大きな転機になったのは、いうまでもなく1976年12月のあの交通事故であった。それを契機に、障害当事者の立場を踏まえて彼の専門領域も大きく広がり、単に研究者としてだけではなく行動する社会福祉学者としての立場を確立する契機になった。しかし彼の教職への復帰の道は必ずしも平坦ではなく、学内外に消極論や疑問も多々あったが、たえず物事を前向きにとらえる彼の積極的で不屈の意志と、岡村重夫学長（当時）や右田紀久恵教授（現在、名誉教授）を初めとする先輩・同僚教員の熱意と支援が、彼の復職を支えたのであった。私自身の彼との付き合いも、あの事故以後に深まったと思う。あの頃は、社大から本学部創設への転機にあっており、それを巡って学内に亀裂が生じつつある時期でもあった。その中で当時彼が治療とリハビリテーションのために入院していた星ヶ丘厚生年金病院に、何人かの同僚教員とほとんど毎週のように通い、彼の復帰をめぐる問題や4年制問題などを話し合ったことを、昨日のことにように鮮やかに覚えている。こうして苦楽を共有することを通じて、彼とは単に同僚であるのではなく、親友としての関係が深まったと思う。

定藤教授のもう一つの転機は、1987年8月から約1年間のカリフォルニア州立大学バークレー校での在外研究であった。その以前から福祉の街づくりや障害者の自立への彼の関心は深まっていたが、バークレーのバリアフリーな街づくりや障害者の自立生活運動に具体的に接し、また折からの「障害をもつアメリカ人法」（ADA）策定の動きをつぶさに研究したことが、彼のその後の研究に計り知れない影響を与えたと思われる。彼の研究業績一覧を見ても、障害者の自立生活等を中心とする障害者福祉関係の業績が、この時期以後に飛躍的に増えている。なお余談ながら、このときの在外研究は、学部内のローテーションでは私の順番であったが、彼は早くから「ぼくは障害があるのでいつ死ぬか分からないから、先に行かせてほしい」と私を泣き落としにかけ、私自身にも出にくい事情がなかった訳ではないので、彼に譲ったと

いう経緯がある。それで正解だったと当時も思い、いまもそう考えているが、そうしたやりとりさえも彼らしく思え懐かしい。

こうした研究の広がりや行動する社会福祉学者としての定藤教授があった。その一端を紹介すると、大阪府福祉のまちづくり検討委員会に関わり、福祉のまちづくり条例制定（1992年）に力を尽くしたこと、市立尼崎高校障害児入学拒否事件の支援活動に強力に取り組んだこと（1991～92年）、大阪自立生活センター研究会の発足とともに代表を務め（1992年以後）、自立生活支援センター・ピア大阪の設立とともに運営委員長を務めたこと（1994年以後）など、障害者運動のまとめ役としても期待され、その他各種の審議会等での活躍など、まさしく行動する研究者の面目躍如たるものがあった。

教育者としての定藤教授についても、彼ほど学生の面倒見の行き届いていた教員は珍しいほどだった。学部と卒業生をつなぐ組織である大阪府立大学社会福祉学会の設立にあたっては、彼は庄谷怜子教授（現在、名誉教授）に次ぐ推進者であったし、ゼミ・卒業論文指導・公務員試験の学習会などでの彼の指導の手厚さは、私たちに真似のできないものであった。彼の逝去に際し、通夜・告別式とも4、5百人を越える参列者があったが、その中に学部・大学院の卒業生・修了生、現役の学生・院生が多数見られたのは、彼の教育者としての立派さを語るものであった。

学部運営の面でも、定藤教授の果たした功績は大きい。大学院設立（1991年）にあたっての彼の果たした役割をはじめ、その他さまざまなことがあり、彼をはじめ心ある同僚達と力を合わせて乗り越えてきたさまざまな場面が、いま走馬燈のように私の眼前にあるが、ここでは障害者特別選抜入試のことだけ記しておこう。学ぶ意欲と能力のある障害のある学生に高等教育の機会平等を図ることは、彼がパークレーで学んだことの一つであり、その実現に向けて彼は事実上の中心であった。1993年3月、学部教授会は彼の提案を受けて障害者特別選抜入試の導入を決定したが、それ以後も彼は全学的な調整過程で資料作成、説明などの中心的役割を担った。その結果、1997年末には全学的な了承を得て、1999年度入試（1999年3月実施）から実施することになり、第1回のその入試で聴覚障害のある学生が入学し、いま勉学に励んでいる。しかしそれを最も切望していた定藤教授は、その実施の直前に急逝してしまっ

た。その不幸な巡り合わせに語るべき言葉もない思いである。

このようにみると、定藤教授は、研究者としても教育者としても、また社会変革者としても大きな業績を残しながら、志半ばにして斃れたと思える。あのとき斃れることになると彼が自覚していたとは思えないが、まるでそれを知っていたかのように彼は生き急ぎ、短い生涯を全速力で駆け抜けて行った。それによって多くの仕事をし、残されたものに忘れ難い影響と印象を残して行ったが、やはりその死は余りにも早すぎたといわざるをえない。彼の夭折が、学部運営面でも負担をかけたことにその原因の一端があるとすれば、私としては悔やんでも悔やみきれない思いがある。

私の耳には、彼が倒れ救急車で運ばれた日（1月26日）、その直前の早朝に、聞き取りにくい苦しそうな声で電話してきた彼の声が、残響のようにいまだに残っている。その時彼は、病状のことや病気のために果たせないいくつかのことへの懸念を訴えていたが、「その対処についてこちらで引き受けるので心配しないように、それより充分養生するように」というと、「これで安心した」とささやくような声で呟いていた。まるで私に言い残したいことがあったかのような電話であったが、最後まで学部や学生のことを気にかけながら逝った彼の死は、まさしく殉職であった。

定藤教授の死後、失ったものの余りの大きさに社会福祉学部もまた戸惑い、いまなお苦しみ続けている。しかし、余りにも早すぎた彼の死に慟哭しつつ、にもかかわらずその悲しみの中に私たちが崩折れてしまうことは、彼の本位ではあるまいと思う。私たちがこの悲しみの中から立ち上がることこそが、もはや再び帰えぬ旅に立つ彼の最後の望みだったのであれば、彼の中断された志を私たちの志として引き継ぎ、さらに歩み続けることを、定藤教授の霊前に齒をくいしばって誓いたい。

定藤教授の眠りの安らかであることを。そして、私たちの歩みを見守って下さい。

2000（平成12）年1月30日

<追記>この追悼号に、本学部教員の他、本学名誉教授の右田教授・野澤教授、また定藤教授の永年の友人である一圓教授・高森教授・古川教授から貴重な玉稿をお寄せいただくことができた。この他にも、ご寄稿を予定されながら、体調不調やその他の余儀ない理由で、丁重なご挨拶をいただいた方々がおられる。定藤教授に代わってお礼を申し上げる次第である。